

子どものことばが豊かになるカリキュラム開発

—授業実践と研究理論からのアプローチ—

堀内 健 高度教職開発コース

キーワード：ことば領域，対話，広げる・深める・高める，
読み聞かせ・サークルミーティング・ことばあそび

1. はじめに

信州大学教育学部附属松本学校園では、幼稚園から中学校卒業までの12年間を貫く“幼小中一貫カリキュラム”の開発を昨年度から進めている。その研究の中で、私は新設領域“ことば領域”（1学年～3学年）のカリキュラム開発を進めている。この“ことば領域”とは、“ことば”に関わる内容を扱うこととしている。しかしながら、現行の国語と外国語活動（英語）と何が違うのかは、はっきりとしたことが言えない。“ことば領域”として私たちは何を研究し、カリキュラム化していけばいいのか、さらに“ことば領域”とする良さは何なのかを、授業実践と研究理論の二つの立場で研究していく。

宮崎（2017）は『『学びの領域』における学びの内容や方法を『遊びの視点』として位置づけることにより、幼稚園での遊びに『学びの領域』に結びつく萌芽を見出し、幼稚園での遊びと小学校での学びとの連続性を保証する。』という。つまり、“ことば領域”においては、幼稚園のことばに関わる遊びから、低学年におけることばの学びの萌芽を見いだしていくこととなる。本学校園では、かつてより絵本の読み聞かせや話し合い活動を大切にしてきた。これらは、子どもたちの言語活動を支えてきたキーファクターだと考えている。そこで、読み聞かせや話し合い活動等をより意識的に位置づけることで、子どものことばが豊かになるのではないかと考えた。

まず、発育発達のどのような“ことば”の学びをしているのか、自分のクラス（昨年度5年生）の子どもたちの“ことば”を見つめ直す事とした。さらに、佐々木学級（昨年度2年生，本年度3年生）の授業構想にかかわり、授業観察から低学年における“ことば”のあり方を検証してきた。しかし、子どものことばのやりとりの中で、子どものことばが豊かになっていくかどうかを私たちだけで判断することは難しかった。そこで、信州大学教育学部の藤森裕治教授を共同研究者とし、専門的見地から研究を進めることとした。

2. 2016年度の実践「他者のことばを受け入れ，ことばを豊かにしていく子ども」

2.1 2016年10月清少納言『枕草子（秋は夕暮れ）』（5年生堀内学級）の実践から

(1) 授業の実際

子どもたちは、清少納言の感じる夕暮れの美しさを最初の読みで感じていた。しかし、S君が「からすはちょっと・・・」と語ると、授業は一変した。子どもたちは、思い思いにからすに対する自分のイメージを語り出した。それは、決して肯定的な意見ではなく、からすを否定的に見るものだった。その発言を聞いていたH君は、「オレンジだから黒が似合うんじゃないの？」とつぶやいた。すると、再び子どもたちは語り始めた。今までからすを否定的に見ていた子どもたちだったが、夕暮れのオレンジとからすの黒のコントラストの美しさに気づいていった。清少納言の夕暮れの美しさと自分たちの夕暮れを重ねて見ていた。

(2) 授業からわかってきたこと

教材研究段階で“からす”を、昔の人が忌み嫌うもの、清少納言が初めて美として表現したことなどは知っていた。しかし私は、後半にある「風の音、虫の音」の部分の風の音に清少納言が趣を感じることに、子どもたちは問いをもつのではないかと考えていた。ところが、子どもたちは“からす”を語っていた。

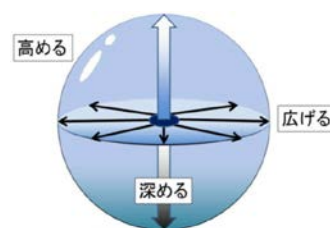


図1 交流の3機能

一見、本題からずれた内容のような“ことば”のやり取りであったが、子どもたちはからすを通して夕暮れの美しさを感じていた。藤森(2015)によると、「できるだけ様々なものの見方や考え方に触れ、それらを優劣や正誤に関係なくまずは受け入れる」ことを「広げる交流」という(図1)。本時、S君の“ことば”をきっかけに、子どもたちは自分の経験の中のからすを語り、“ことば”を広げていった。そこに、H君の“ことば”によって、オレンジと黒のコントラストから、夕暮れの美しさを見出していった。授業後のH君は、「今日、夕暮れ見れるかな。からすもいたら見たいな。」と教師に話しかけてきた姿からは、“ことば”の高まりを感じた。

2.2 2017年2月 私の好きな「金子みすゞの詩」(2年佐々木学級)の実践から

(1) 授業の実際

佐々木学級では、一年を通して“詩”を扱ってきた。2016年2月、Yさんが大好きな詩、金子みすゞの『不思議』を扱った。その際、Yさんを先生役とし、授業を行った。普段人前では多くを語らないYさんだが、本時のYさんは友だちの発言を受け止めながら、それに対する自分の考えを語っていた。

Rさん：私が不思議って思ったのは、アサガオの種は黒いのに咲くと、不思議に紫とか青とかきれいな色になるのが不思議だと思いました。私は不思議でたまらない、黒いアサガオのたねさんが、きれいな色のアサガオになるのが。

Yさん：Kくんへの感想に似ているんだけど、たねにさんがついていて、あたたかい感じがしていいと思うし、アサガオがきれいな花を咲かせるって、アサガオが聞いたらほめられているって感じになって、うれしいと思います。

佐々木：聞いたら嬉しいだろうねえ。

授業の中で、身の回りの不思議を語っていく子どもたちがいた。それに対して、Yさんは、一人一人に丁寧に受け答えをしていった。

(2) 授業からわかってきたこと

私は2年生のYさんがどうしてこんなにも友のことばに対して的確に、しかも自分のことばで返すことができたのか、考えさせられた。

Yさんには自分の好きな詩を紹介したいという思いと、「みんなにはどんな不思議があるのか」と聞いてみたいという願いがあった。だからこそ、友の声をよく聞き、一人一人に対してコメントを言い、そして自分の思いも語りたくなっていたのではないだろうか。

今回の授業から、教師の関わり大切さを考えさせられた。今井(1986)は「人への信頼感がことばを生み、ことばを育てると言うことを決して忘れてはならないと思います。」という。佐々木教諭は、Yさんのことばをコメントごとにリボイス(藤森, 2015)していた。そのリボイスによって、Yさんは安心して自らのことばを語りたくなっていった。

自分の好きなこと伝えたいと願うYさんがいて、それを受け止めてくれる仲間がいて、Yさんの思いを受け入れてくれる教師がいる。そのような関係性の中にも、子どものことば豊かになる可能性を感じた。(自分のことばを語り受け入れられる教室の空気)

3. カリキュラム開発

3.1 昨年度の実践と理論の融合

上記実践から、子どものことばは、自己と他者と材との対話によって豊かになっていくと見えてきた。子どものことばがどのように変容し、豊かになっていくのか、私自身の授業の見方も変わってきた。しかし、その事実だけではカリキュラム作成は難しいと考えた。そこで、今年度、藤森教授と共同でカリキュラムについて検討してきた(図2)。

子どもが発揮する資質・能力	ことば領域における学びとしてカリキュラム化される3つの活動	学力発達の方向性として求められる3つの局面
自己表現に関わる姿 自分が考えたり感じたりしたことや自分のものの見方考え方を、ことばで思考・判断し、発信することができる。	【ことばあそび】 我が国に伝統的に伝わる言語遊戯としての文化(折句・回文・なぞなど)のみならず、言葉素材にして様々な遊びを楽しむ活動であり、教師は自ら言葉に触れることのおもしろさを体現してみせる。これによって子どもたちは言葉遊び道具として感じ、自己の語彙や語感を豊かにしていく。	高める ・知識の発見と創造的思考 ・自己の言葉の他者化
課題探究に関わる姿 自ら抱いた問いの解明に向けて必要な情報を、友との対話や本などから集め、整理、分析などして、解決することができる。	【読み聞かせ】 日本語のみならず英語絵本なども用い、教師による集団への朗読を基本形態として行う読書活動であり、教師は子どもたちと対話的に本を読み進める。これによって子どもたちは作品世界に没入し、本を味わう楽しさを覚え、自らの興味関心を自覚しながら進んで読書に親しむことになる。	深める ・知識の洗練と収斂的思考 ・他者の言葉の批評
社会参画に関わる姿 子どもたちを取り巻く社会環境への主体的な参加を通して、多様な人々とことばによるコミュニケーションを交わし、共感的にかかわることができる。	【サークルミーティング】 子どもたちにとって身近で話し合うことに必要感を覚える話題をもとに、他者と車座になって交流・協働する言語活動であり、教師もその参加者として子どもに寄り添う。これによって子どもたちはパブリックな言葉の使用を経験し、多様な言葉との出会いを楽しむ。	広げる ・知識の拡充と拡散的思考 ・他者の言葉の受容

図2 ことば領域カリキュラムマトリックス

以下はカリキュラム開発のベースとなる我々の基本的な考えである。

- (1) 本校の子どもが発揮する資質・能力(自己表現力, 課題探究力, 社会参画力)
- (2) ことば領域における学びとしてのカリキュラム化される3つの活動
 - ・ことばあそび
 - ・読み聞かせ
 - ・サークルミーティング
- (3) 学力発達の方向性として求められる3つの局面

3.2 2017年11月「わたしが選んだ昔話や民話」(3西佐々木学級)の実践から

(1) 読み聞かせとサークルミーティング

カリキュラムマトリックスをもとに、子どもが選んだ本を、公開研究授業に参加した参会者の先生方に読み聞かせをし、そして意見をもらうという実践を行った。Oさんは『し

ばいのすきなえんまさま』を選び、読み聞かせをした。大人相手にどのような読みがいいのか、何度も何度も読み返し、仲間と共に表現を確かめていった。

読み聞かせ後、Oさんは自分の選んだ理由を語った。その後、参会者が感想や質問を語った。Oさんは、その一つ一つに丁寧に応えていた。しかし、Oさんと異なる読みをしていた大人のことばに、Oさんは一旦止まった。そして、じっと考えていた。

2回目、3回目の読みの後も、同じようなやり取りをしていた。その時、Oさんは1回目の大人の読みに対して、自分の読みを重ね、新たな読みへと更新していった。

(2) 授業からわかってきたこと

私たちは、当初読み聞かせを教師がすることによって、子どもが「作品世界に没入し、本を読む楽しさを覚え、自らの興味関心を自覚しながら進んで読書に親しむ。」と考えていた。それにかかわる実践を積み重ねることで、子どもたちは進んで作品世界へ没入していった。そして、サークルミーティングによって、子ども同士の対話を通して、その子のもつ本の世界観を広げていった。しかし、今回大人相手に自ら読み聞かせをすることで、Oさんは読み方を工夫し（自己表現する姿）、質問に対して自らの読みを更新し（課題探究する姿）、大人と対等な感覚で受け答える（社会参画する姿）ことを通して、Oさん自身の“ことば”が広がり、読みが深まっていったのではないだろうか。

4. 今後のカリキュラム開発に向けて

“子どものことばが豊かになる”ということは、他者のことばを受け入れ、元々自らも持っていることばと往還することを通して、そのことばに内在する意味が広がり、または深まることなのではないだろうか。これまでの事例からも、明らかに子どものことばは他者のことばから影響を受け、新たな自分のことばとして発せられている。そのことばは、たとえ最初のことばと同じであったとしても、新たなことばとして生成されている。

しかし、子どもの姿からことばの豊かさを語ることはできたとしても、客観的観点で定まっていないため汎用的な評価ができないのも事実である。何をもって子どものことばの豊かさをはかるのかという、共通の観点が定まらない限り、評価も定まらない。カリキュラム開発の立場から考えると、今後本校で考える自己表現力・課題探究力・社会参画力の3観点におけることばの豊かさをみとる評価法の開発も必要である。

文 献

今井和子：ことばの中の子どもたち，童心社（1986）p. 202

福永睦子 藤森裕治：交流，日本国語教育学会（2015）pp. 62-69

藤森裕治：授業作りの知恵 60，明治図書（2015）pp. 32-33

堀内健：ことばが豊かになっていくこども，附属松本学校園公開研究会紀要（2017）pp. 34-37

宮崎樹夫他：「学びの総合化」による幼小中一貫カリキュラムの開発：デザイン，計画と体制，意義，信州大学教育学部研究論集 第10号（2017） pp. 79-90